性約バッドエンド童謡

マッチ売りの娼女

本編…47枚（基本30枚）
エロCG…34枚
非エロCG…13枚

寒い冬の夜
私は寒さに震えながら
通行人にマッチを買って
くれるよう呼びかけていた…

「どなたかマッチはいりませんか？」
「マッチはいかがですか？」
誰も立ち止まってくれない…

「マッチを売ってくれ」
振り向くと、男の人に手を握られ、
手の中には、マッチを全部売っても
お釣りがくる大金があった。

「お母さんと弟が待ってるのに…」
「場所が悪いのかなぁ…」

「分かるよね…？」

男はゲスな笑みを浮かべて
そういった。

私は何かが分からないまま、
その男に招かれ、暗い裏路地の
闇に溶け込んでいった。

「後ろを向いて
壁に手を付くんだ」
えっ……

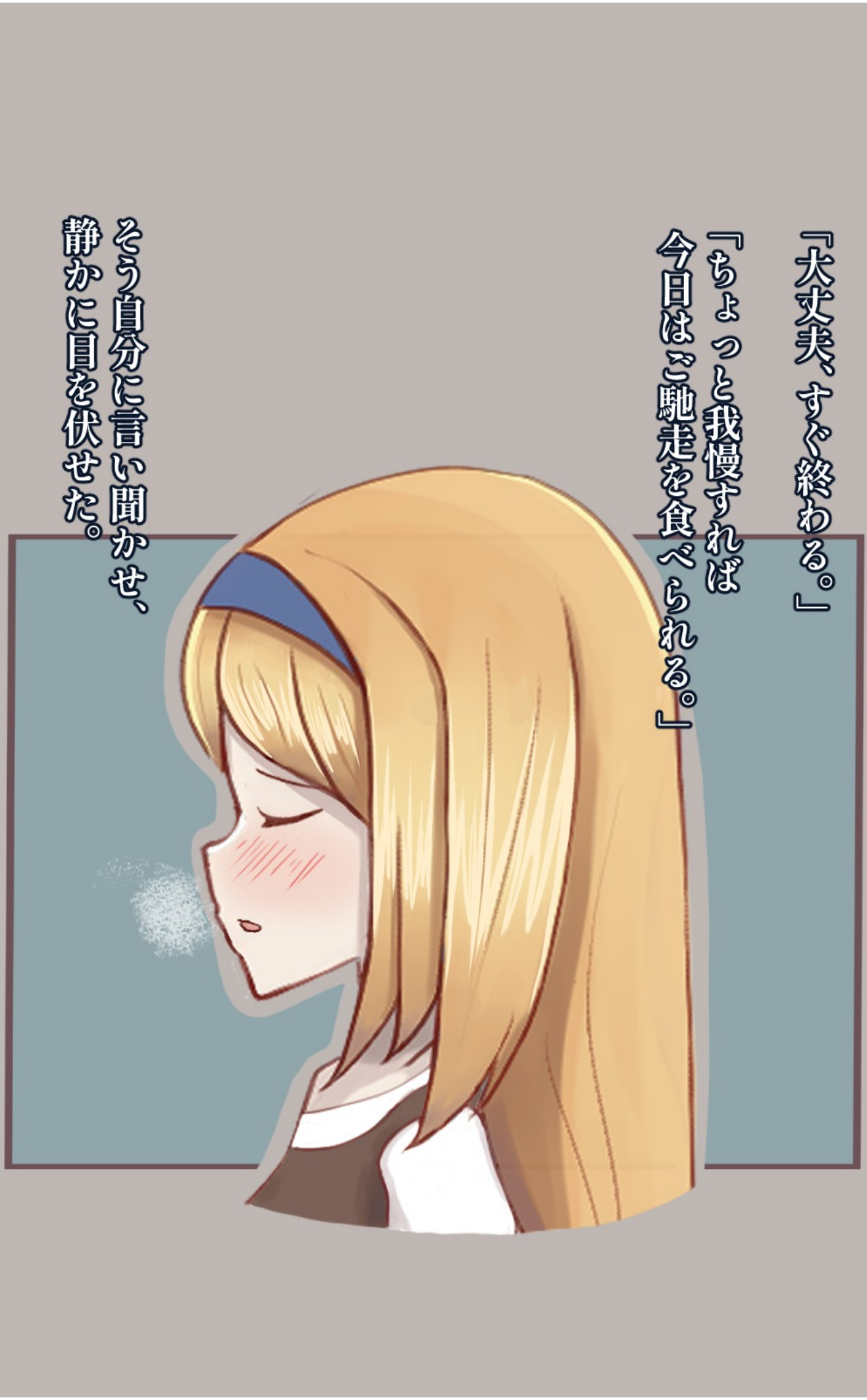
「いいの？そのマッチ売らないと困るよね。」
「もう一度言うよ、分かるよね…」

男はそう言うと
スカートをたくし上げ、
両手で私のお尻を掴んだ。

私は抵抗し、
手を振り払おうとした。

「弟とお母さんが待ってる…」
「大丈夫、少しの間だけ…」

男は私の秘部に男の
そそり立った肉棒を当ててきた。
当たった肉棒に体温を感じるのに、
刃物を突きつけられている
ような寒気を感じた。


『大丈夫、すぐ終わる。』
「ちょっと我慢すれば
今日はご馳走を食べられる。」
そう自分に言い聞かせ、
静かに目を伏せた。

ぶち…

鈍い音が私の体内に
響き渡り、下腹部に
激痛が走った。
穢れた刃物が私を貫き、
秘部から太ももに血が流れ、
雪を赤く染めた。

気を失ってしまいそうな痛みを
感じているのを無視して、
男は乱暴にその汚れた刃物で私を
貫き続けた。
ぶぷっ
ぶぷっ
貫かれるたびに何かを
奪われたかのような
悲しみが私を襲い、
心が寒かった…

「そうだ…マッチで暖まろう…」

「なんて暖かいんだろう…
まるでストーブの前に座ってるみたい…」

火の暖かさは寒かった心を暖めてくれた。

ずぷっ♡
ずぷっ♡
私はもっと暖まろうと、
火に近ずくと火が消えて、
貫かれる痛みと寒さが蘇った…。
だから、私はその男が貫くたびに
マッチに火を灯し、心を暖めた。

男は限界が近いみたいだった。
男の物は脈打ち、段々と腰の動きが乱暴になってきた。
直感的に終わりが近いと分かった…
これが終われば、暖かい食事にありつける。
ズチュ
ズチュ

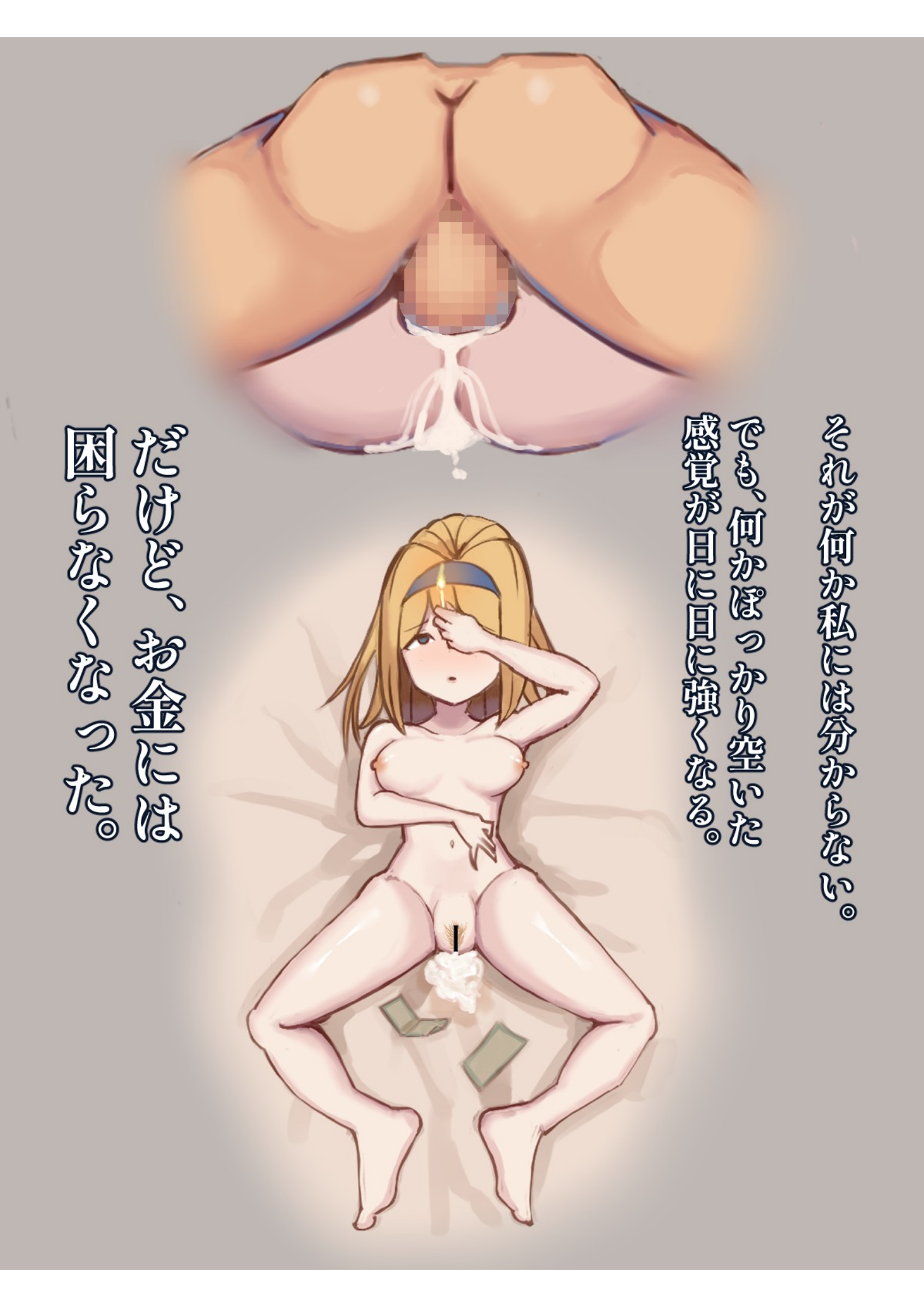
私が安堵した瞬間、
男が低い呻き声を上げた。
「いっ…イクっ…！」
ドクッ
ドクッ
ドピュルルル!!
その瞬間刃物は乱暴に
のたうちまわり…
私の中に熱い何かを
吐き出した…

熱い白濁液が私の中から
流れ出し、赤く染めたはず
の雪を白く染めた。

熱いはずなのに凍える
ような喪失感…
その男は私を穢した。

そのかわり…
手に入るはずがない大金が残った。
私はマッチをもう一本擦り、
体を暖めた…

それから私は色んな
男の人に体を売った…
その度に分からない
何かを失った。

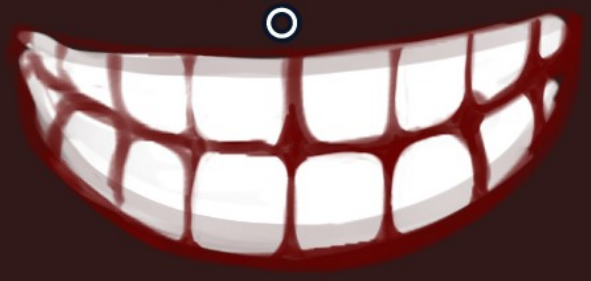

それが何か私には分からない。
でも、何かぽっかり空いた
感覚が日に日に強くなる。
だけど、お金には
困らなくなった。

ある日、
はじめて相手をした男に
声を掛けられた。

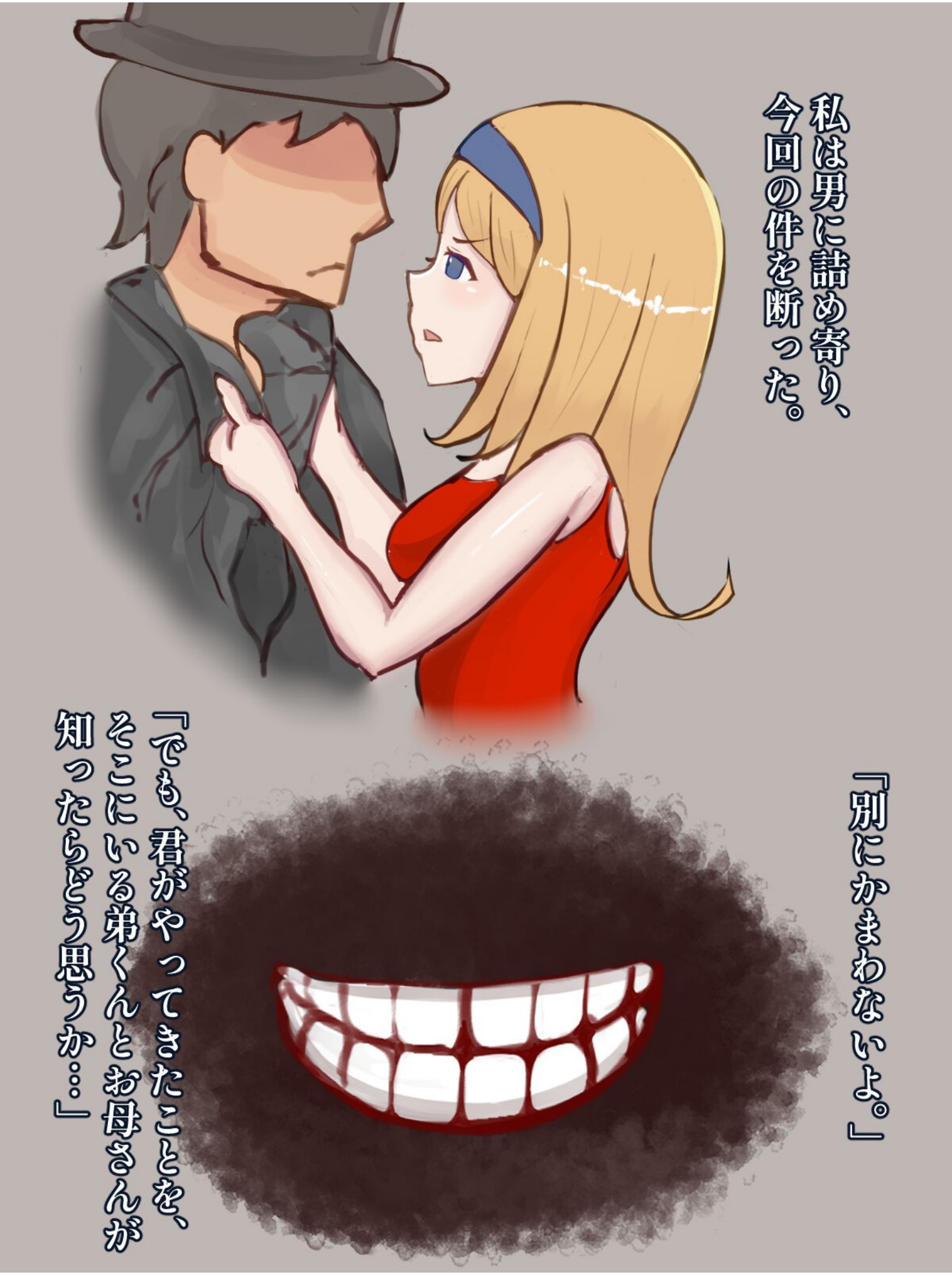
「この間の金額の3倍
出すから相手をして
欲しい人がいる。」

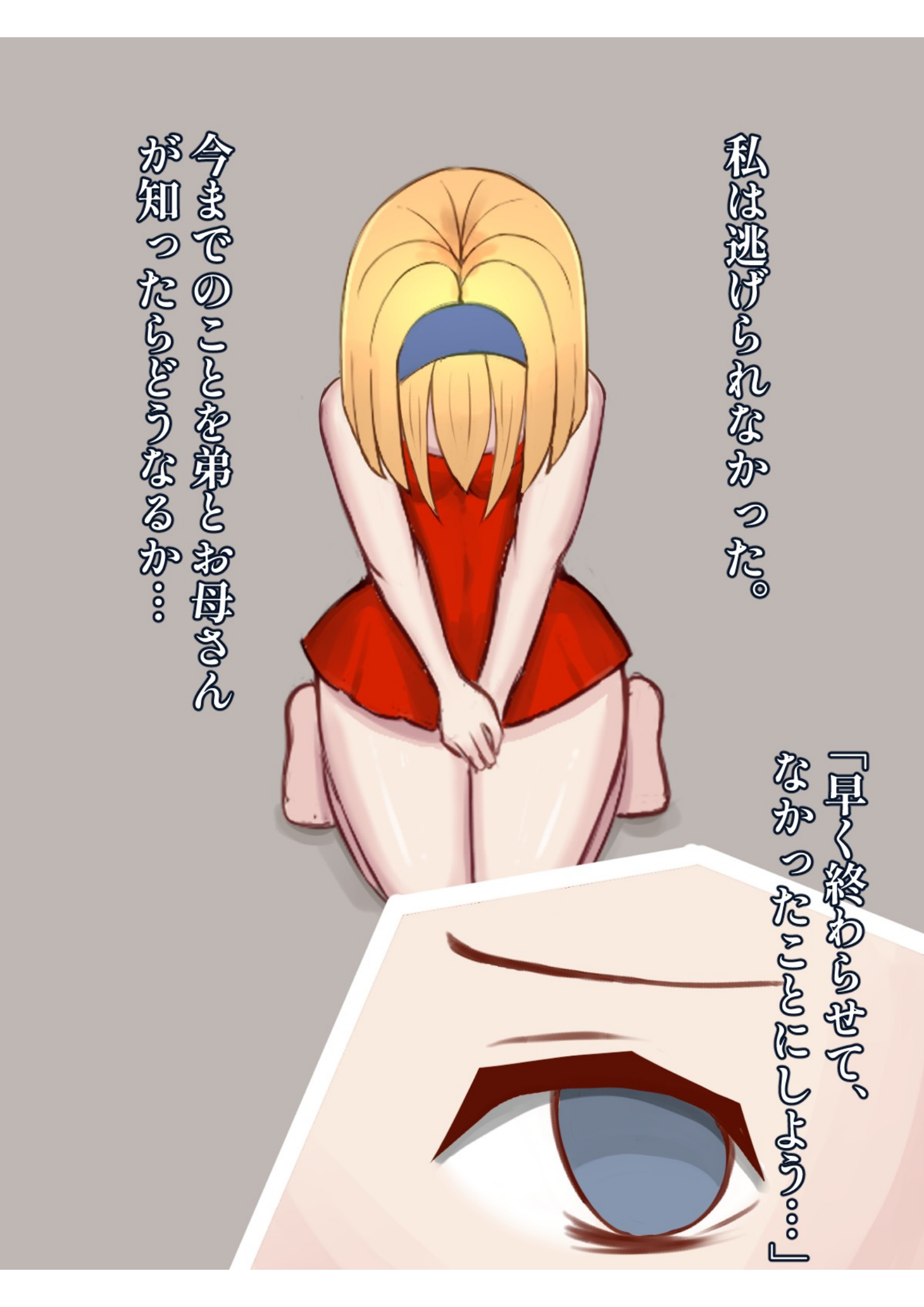
私はいつもの事だと
思い、軽い気持ちで
了承した。

男は以前見せた
下卑た笑みを見せた。



私は相手を見て驚いた。
目隠しされて、生まれた
ばかりの姿をした弟が立っていた。


私は男に詰め寄り、
今回の件を断った。
「別にかまわないよ。」
「でも、君がやってきたことを、
そこにいる弟くんとお母さんが
知ったらどう思うか…」


私は逃げられなかった。
今までのことを弟とお母さんが知ったらどうなるか…
「早く終わらせて、なかったことにしよう…」

は♡
あぁ♡
私は弟の前にしゃがみこみ、
肉棒を口に咥えこんだ。

ヤメ…ッ
ちゅぱ
ちゅぱ
「汚いよ…」
「それに凄く、くすぐったい…」
私は咥えこんだ肉棒の刺激を
強め、早く果ててくれることを
祈った。

弟の肉棒が咥えこんだ口の中で脈打ち、白濁液が胃に流れ込んできた。
『だめ…何か出そう…』
ドクッ
ドクッ

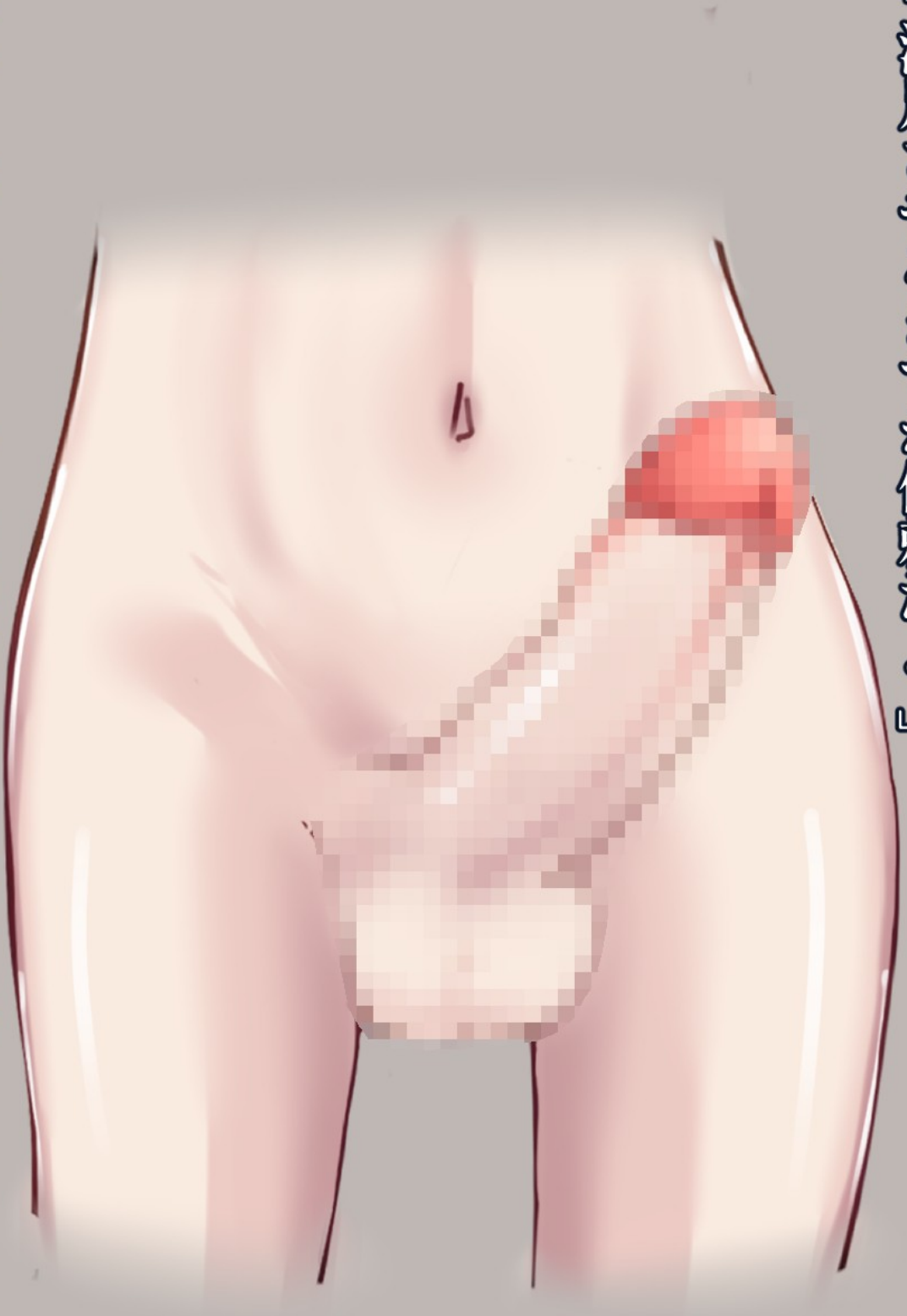
流れ込んできた白濁液は熱い
はずなのに、弟の初めてを奪った
罪悪感で胃は冷えきり心が寒い。

「もう終わったんだから、帰ろう…」

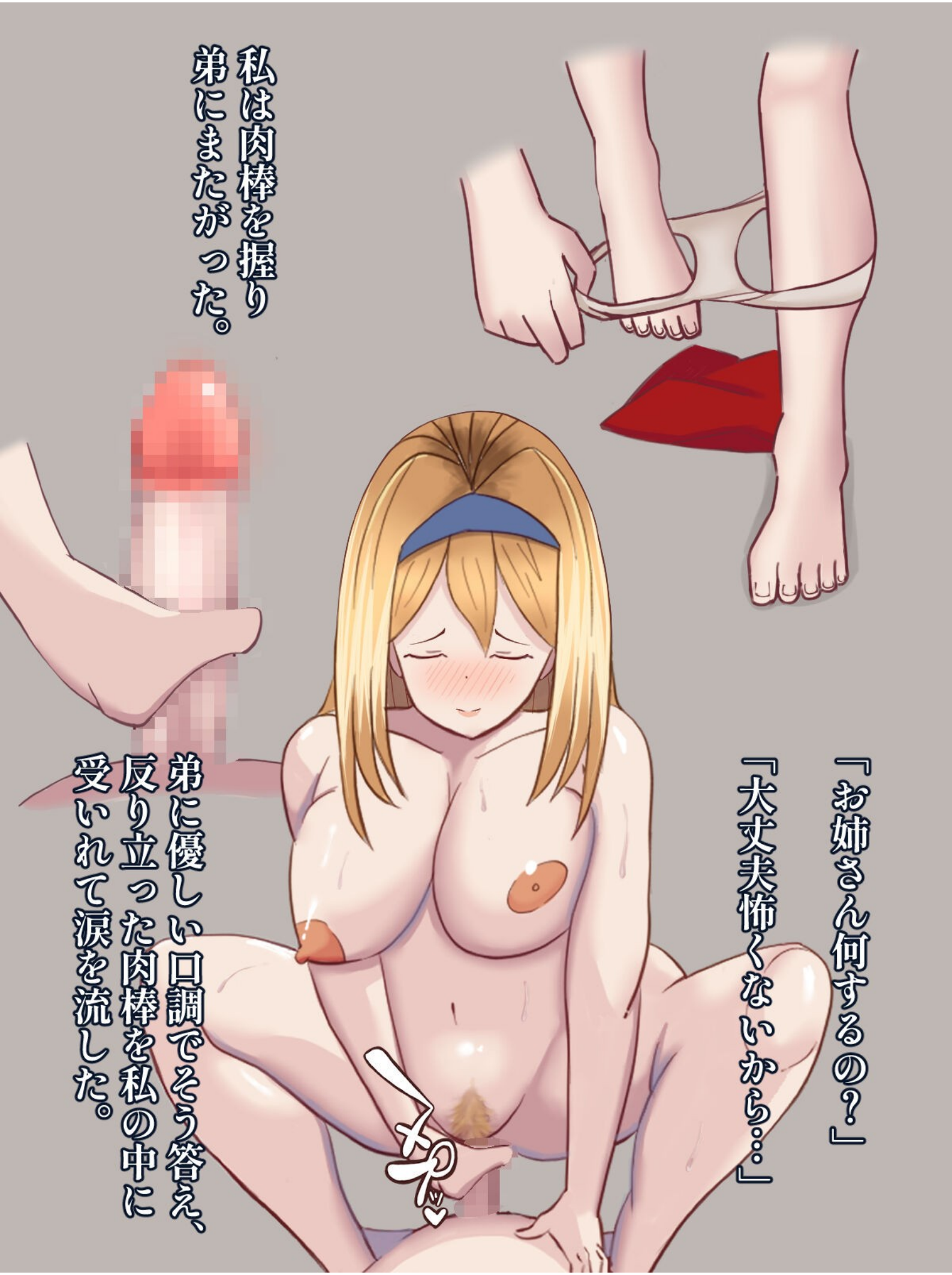
男にそれを促すと男は指差す。

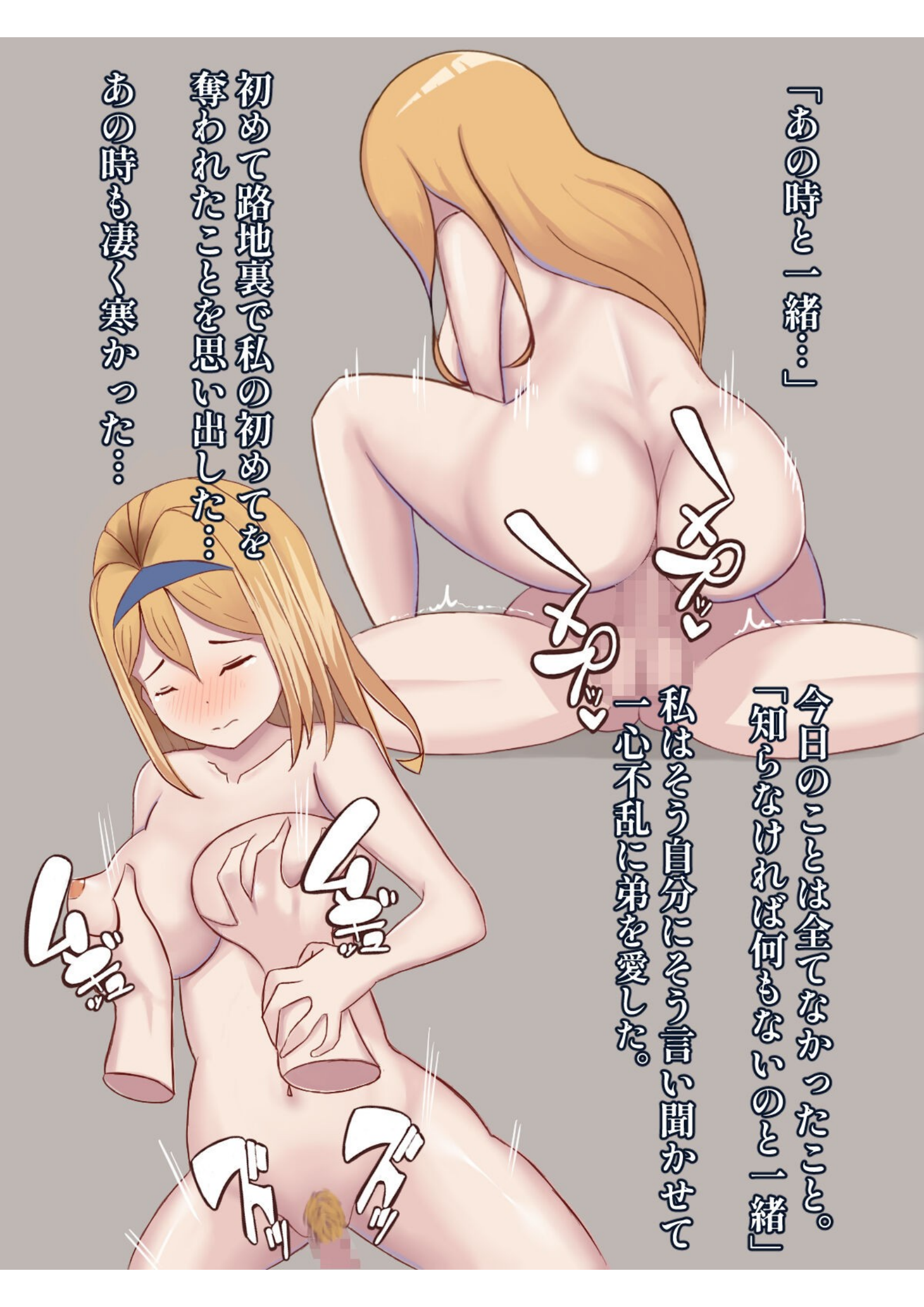
「まだ終わってないじゃないか…」

弟の肉棒が前よりも、たくましく反り立っていた。
「満足させるまでが依頼だよ。」

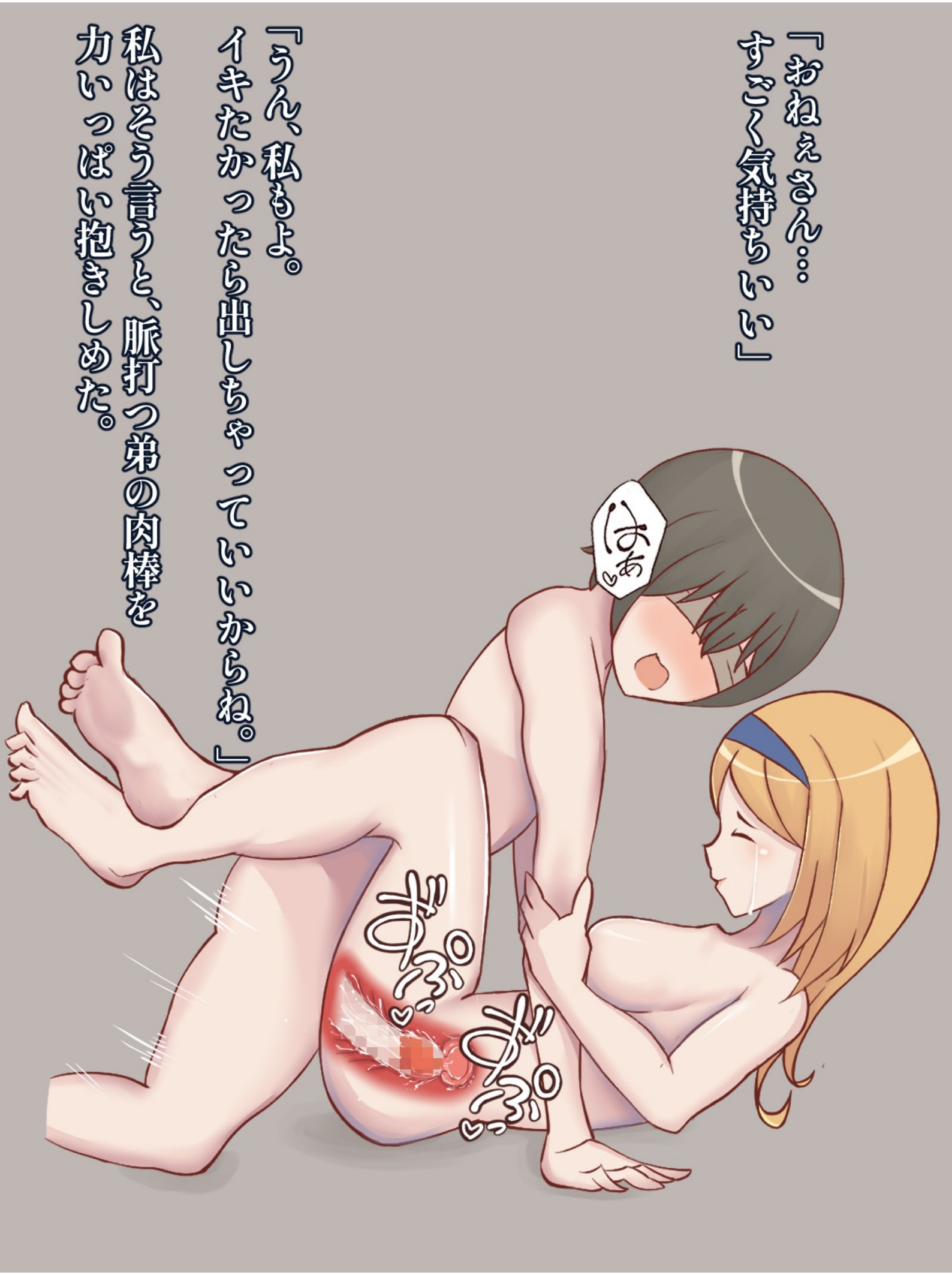


「私としては弟くんと穴兄弟になりたいね。」
男は下卑た笑みを浮かべて
そういった。


私は肉棒を握り
弟にまたがった。
「お姉さん何するの？」
「大丈夫怖くないから…」
弟に優しい口調でそう答え、
反り立った肉棒を私の中に
受いれて涙を流した。

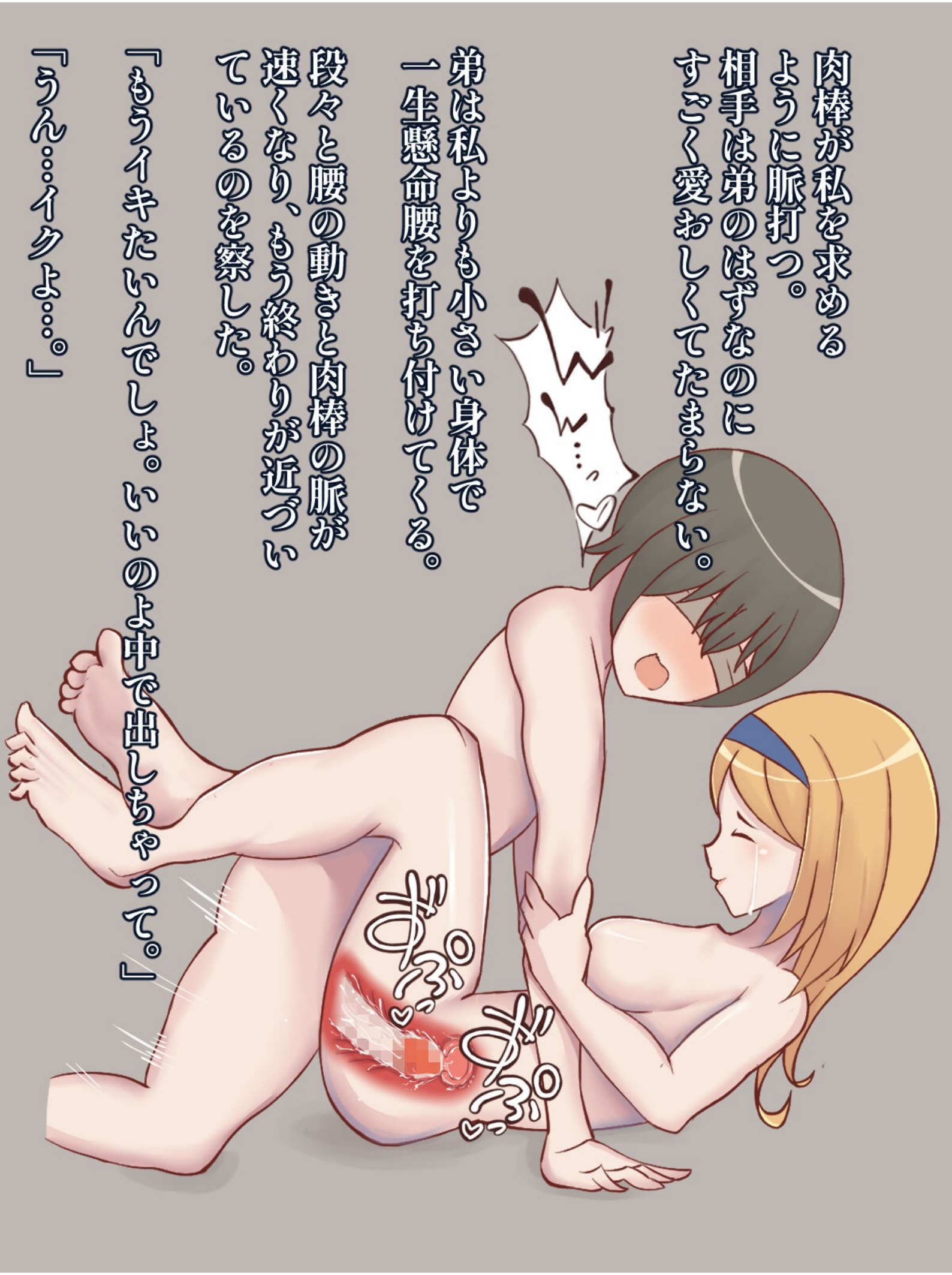

「あの時と一緒…」
今日のことは全てなかったこと。
「知らなければ何もないのと一緒」
私はそう自分にそう言い聞かせて
一心不乱に弟を愛した。
初めて路地裏で私の初めてを
奪われたことを思い出した…
あの時も凄く寒かった…

「おねぇさん…
すごく気持ちいい」



「うん、私もよ。
イキたかったら出しちゃっていいからね。」
私はそう言うと、脈打つ弟の肉棒を
力いっぱい抱きしめた。

肉棒が私を求める
ように脈打つ。
相手は弟のはずなのに
すごく愛おしくてたまらない。



弟は私よりも小さい身体で
一生懸命腰を打ち付けてくる。
段々と腰の動きと肉棒の脈が
速くなり、もう終わりが近づい
ているのを察した。
「もうイキたいんでしょ。いいのよ中で出しちゃって。」
「うん…イクよ…。」

肉その瞬間、弟の肉棒が私の中で
跳ね上がり、弟の白濁液が私の中
に流れ込んでくる。
暖かい…
すごく幸せな気持ちだった。
「おねぇさん…ありがとう」

「本番はこれからだよ…」

低い男の声が耳に響き、
冷水を浴びせられた気分だった。

「私もまぜてもらおうか、
弟君のこっちは初物だよね？」
男はそう言うと、いきり立った
醜い肉棒を、穢れない弟の菊穴
に突き立てた…

「話が違う、この子には絶対に手を出さないで。」
だが、男は無慈悲に弟の菊穴を貫いた。

菊穴からは血が滴り落ち、
シーツを深紅の血で染めた…

弟は痛みに耐えきれず叫んだ…
何度も何度も私と母の名を呼び
助けを求めた。
「姉弟揃って締りがいい…」
ぶっぷ
ぶっぷ
助けて…
お姉ちゃん…
母さん…
どうして…

「そうそう、頑張ってくれた
弟くんにはご褒美をあげないとね。」
「おねぇちゃんに助けて欲しいんだ
ったかな？それじゃ助けてもらう
といい。」
そう言うと男は弟がしていた
目隠しを外した…
ぶっぷ
ぶっぷ
痛い…
裂ける…
やめて…

「おねぇちゃん…？」
「ごめんね…ごめんね…」
私は必死に謝った。
お姉ちゃん…僕を騙してたの？
「違う…違うの…」
ごめんね…ごめんね…
違うの…許して…

「違わないよね。」
「だって男の人に体を売ってたんでしょ。最低だね…」
「ねぇ、僕を騙して楽しかった？」
ごめんなさい…
違うの…
「くそっ…お前なんて姉ちゃんなんかじゃない」
「この汚らしい売女」
弟の言葉が突き刺さり心が凍り付いた…
プルッ…ッ

「売女！お前は変態だから、
本当はケツの方がいいんだろ？」
弟は蜜壺から肉棒を引き抜き、
私の菊穴に猛り狂った肉棒を力いっぱいねじ込んだ。
「そこはダメ…いっ…痛い…」
「うるせぇ！ダメじゃねぇだろが！」
「売女のくせに痛いなんていってんじゃねぇよ。」
「ほら気持ちいっていってみろよ、この売女」

力いっぱいねじ込まれた肉棒が私の肉壁を引き裂き、猛りくるった肉棒に血が絡みつく。
弟はゴミを見るような目で腰を打ち付けてきた。
「ごめんなさい…ごめんなさい…」
「うるせえよ、あやまればすむと思ってんじゃねえよ。」
ごめっ…んなさい…
どぢゅっ
どぢゅっ
どぢゅっ
どぢゅっ

「お前のせいでこんな汚ねぇおっさんにケツ穴掘られてんだろうが」
「痛くて気持ち悪い以外感じねぇんだよ」
「お前はいいよなケツ穴掘られて喜んでんだから。」
痛いよね…
苦しいよね…
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「知ってるか、ここって糞する穴なんだぜ」
「お前の糞がオレのにこびりついて汚ねぇんだよ！」
「お前の汚ねぇケツ穴に、俺のをぶちまけてやるよ。」
「この糞以下の糞売女」
気が…
済むなら…
好きに…
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

次第に弟の動きが私の肉壁を殴りつける
かのように粗々しく犯す…
そして猛り狂った肉棒から、どす黒いものが…
解き放たれた…
あっ
あっ♡
あっ♡
ドクドク
ビクン
ビクン

プツン…
私の中で何かがこと切れた音がした…
その瞬間何もかもがどうでもよくなった。
ぶるぶる
ぶるぶる
ブリュ…ッ
ビクッ
ビクッ

私は無意識のうちに枕元にあった
マッチをあの時のように擦っていた…
『なんでこんなことになったんだろう…』
『まぁいいや…だって暖かくて幸せなんだもん…』